

浄土

monthly JSDO



2016
April

貧乏董

印判手の鉢

三宅政吉

新連載①



直径190ミリ、高さ60ミリ、厚みは10ミリと頑丈である。中には松竹梅と菊、中央には花と蔓の絵。外側には牡丹が三つ描かれている。印判は荒いが、絵は丁寧な型が彫られている。底は経年の汚れか、窯変によるものか変色し、書かれた文字は判読できない。

写真の鉢は、新井薬師の骨董市で埃まみれで並べられていた。中くらいの大きさの鉢を探していたのだが、なかなか値段的に折り合うものが見つからなかった。いいものはあるのだが、それはいいものなりの値段がついている。引き上げようと門を出たときに、入り口の露店に置かれた鉢に目がとまった。手にするとずっしりと重い。店主に「いつ頃のもの？」と尋ねる。店主は鉢を取って、新聞紙でぎつと埃をとり、「明治の後期あたり」と言う。染付けではなく印判手によるものである。

印判手でも呉須とよばれる日本産のコバルト系の染料を使った繊細な青ではなく、もっときつい青である。明治時代に西洋から輸入された酸化コバルトによる印判である。たしかに明治以降のものだろうが、たぶん大正か、もしかすると昭和も戦前くらい

のものである可能性もある。まあ、明治だろうと大正、昭和だろうと私には問題ない。問題は値段である。八百円くらいまでならと思いつながら店主に聞いてみる。「五」という返事である。さんさん高い鉢を見てきたものだから、「五千円？」いくらなんでも高くないかい」と私が言う、店主は「五百円」と言う。そんなもんだよね、と思いつつ私は「もう少し安くならない」と厚かましい。店主はちよつと渋い顔をして「四百円にしとくよ」。

帰ってから、漂白剤につけ汚れを落としてみた。

どこにも傷らしいものはない。つくりは頑丈である。これなら少々手荒く扱っても割れることはないだろう。日常使うものだからそれが一番である。店主の言う明治後期が正しいのかどうか、骨董はもちろん正しい知識を必要とするが、むしろ私はその物を手にしたときの妄想こそ大事にしたい妄想派である。大正から昭和初期にかけての貧しい家庭の食卓で、この鉢に芋の煮物が盛られている光景が思い浮かぶ。食卓を囲んだ家族は、器の出来不出来や絵柄など気にしないだろう。

名品、名器とよばれるものはたしかに素晴らしい。しかしそれらは飾り物である。博物館や美術館で眺めればいいのである。百年近くを、人の手の温もりのなかで過ごしてきた器こそ、私にとっては貴重なものである。

東京・小石川

光圓寺

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

寺院紀行



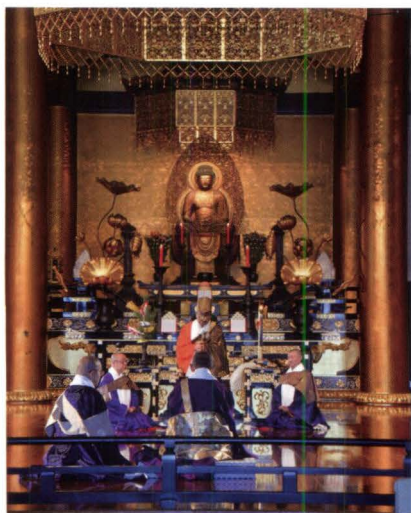
光圓寺本堂、中村喜堂先生による最勝尊の額が掲げられている。



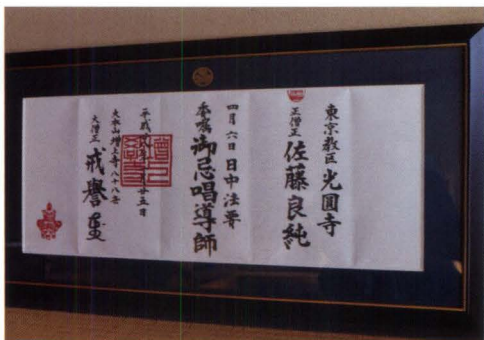
光圓寺本堂内陣。



本尊阿弥陀如来坐像。
恵心僧都作と伝えられる。

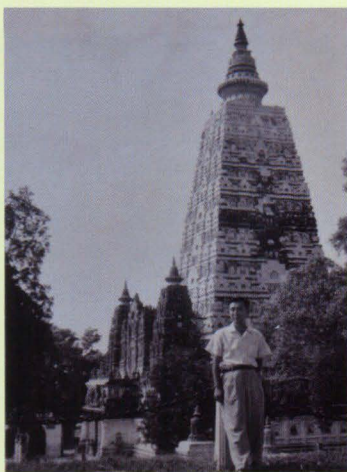


平成二十八年一月二十五日、大本山増上寺での御忌唱導師教書伝達式。八木季生台下正面の後姿が佐藤住職。

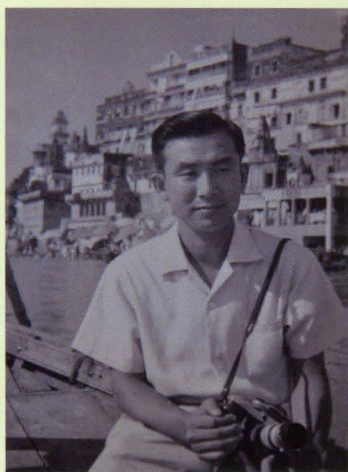


伝達式では四月六日の日中法要御忌唱導師が委嘱された。

ブッダガヤの大塔を背にして。



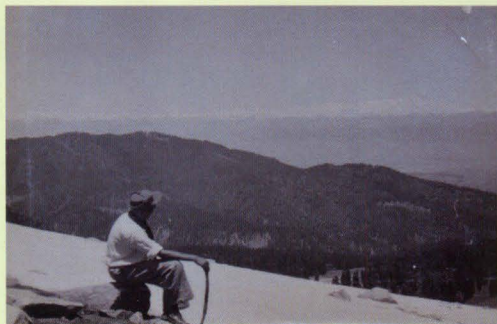
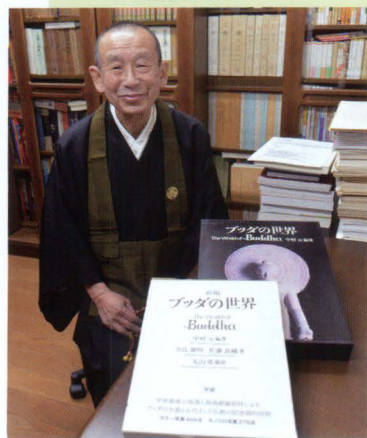
インド留学時代、ベナレス・ガンジス河での佐藤住職。



日本人の留学生とともに、
デリーのクトゥブミナール
塔の上で。
右から、奈良康明(後の駒
澤大学学長)さん、佐藤住
職、奈良毅(後の東大教授)
さん。



中村元先生との共著、『ブ
ッダの世界』と佐藤住職。
書庫にて。



カシミールのナンガバルバットを望む山にて。
この後、この雪渓を滑り落ちたが九死に一生を得た。

年に十五回行われる明照幼稚園の「御堂参り」。佐藤良文園長が園児に話をされる。



永井荷風の作品にも登場する光園寺の大公孫樹。戦災で焼けたが、また芽吹いている。



光園寺入り口は明照幼稚園の園庭でもある。本堂は右手奥で、入り口からは見えない。



光園寺歴代住職の墓。



歴代墓の石塔中央には開山行基の名が彫られている。

浄土

2016/4月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 東京 小石川 光圓寺	写真＝真山剛	1
連載 法然上人のお言葉②	梶村 昇 英訳 河西良治	6
御忌会のゆかしさ	勝崎裕彦	8
寺院紀行 東京 小石川 光圓寺	真山 剛	12
連載 響流十方	林田康順	18
連載 江戸の川を歩く②	森 清鑑	22
連載小説 渡辺海旭⑥⑦	前田和男	26
連載 誌上句会	選者＝増田河郎子	32
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろう	35
編集後記		36



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

表紙写真＝鬼海弘雄

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

法然上人のお言葉

ご法語

宗を立てる事、更に仏説にあらず。自ら学ぶ所の経論に付きて、その義を覚^{さと}り極むるなり。諸宗の習い、皆もつてかくの如し。今、浄土宗を立てる事は、浄土の正依^{しうゑ}の經に付きて、往生極樂の義を解^{さと}り得たる先達^{せんだつ}の宗名を立てるなり。

(禅勝房に示されける御詞)

現代語訳—宗を立てることは、決して仏説ではない。自分で学んだところの經典や論書について、その真意を知り、それを極めたものである。諸宗のしていることは、みんなこのようなものである。今、浄土宗を立てるといふことは、まさしくよりどころとすべき浄土經典に基づいて、往生極樂の教えを体得された先人が立てられた宗の名である。

Honen Shonin's Sayings

Founding a new religious sect is not at all included in Buddha's own teachings. Such a sect is a final destination that a religious founder has reached by comprehending the real intentions of Buddhist scriptures and articles which he himself has learned. Those religious sects are all formed in this way. That I now establish the Sect of Pure Land means that I form the religious sect that was founded and named by my predecessors who, relying on its proper scriptures, had mastered the teaching of the rebirth in the Pure Land. (*The Words Honen Taught to Zenshobo*)

Commentary

In the days when he founded a new sect called "the Sect of Pure Land", Honen was the target of a lot of criticisms and slanders. Their point was that there was

解説

法然上人が浄土宗という新しい宗を立てたことに、当時、多くの非難や中傷が起きました。それは「なにも新しい宗を立てなくても、今までの念仏往生を勧めれば済むことなのに」ということでした。たしかに当時の比叡山は、今流に言えば、天台学部を中心に、密教・律・浄土・禪という学部を擁した総合大学のようなものでしたが、説くところは、最後は天台の教えに帰って仏に成れ、というものでした。

たとえば念仏にしても、それは一つ所に心を定めるための補助の行であって、天台の教えに帰るための寓宗ぐうしゅう、すなわち居候的存在で、念仏だけで救われるという独立した教えではないのです。それを法然上人は、念仏は阿弥陀仏の本願であり、念仏を申せば、それだけで極楽に往生できるという独立した教えであるということを明らかにし、浄土宗という新しい宗を立てました。この法語では、新しい宗を立てるということは、決して仏説ではないが、釈尊の教えを行じ、その真意を知れば、必ずこうなるものだとして述べております。こう考えていきますと、仏教は生生発展しながら、新しく展開していく宗教であり、ただ開祖の教えを祖述していくだけの宗教ではないと思わせられました。

no reason to make an effort to form any new sect, because the conventional nembutsu of those days was sufficient for people to go to the Pure Land. Compared with our present-day society, Hieizan in those days was, as it were, a contemporary university, consisting of the "Faculties" of the main Tendai, Esoteric Buddhism, Ritsu, Pure Land and Zen. What was preached there was that priests should ultimately return to the teachings of Tendai and become buddhas.

The nembutsu, for example, was still thought of as a practice supplementary to the concentration of one's mind upon a particular object. It was a "gushu", a dependent sect in preparation for returning to the teachings of Tendai: it was like what we call an "isourou" in Japanese, which literally means "a person who depends on another person for food and lodging". That is to say, the nembutsu at that time had not yet been an independent sect preaching that it was sufficient for the salvation. Then Honen established the Sect of Pure Land as an independent doctrine, saying definitely that the nembutsu was Amida Buddha's Original Vow and that only its uttering enabled people to be born in the Paradise. In the above quotation, Honen stated that the founding of a new sect was by no means what Buddha himself had taught, but that, if Buddha's teachings were put into practice and his true intentions were understood, a new sect would naturally come into existence in this way. Thus it has turned out that Buddhism is not a religion which only repeats the exposition of its founder's doctrines, but one which sustains a vigorous and steady growth in a new direction.

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

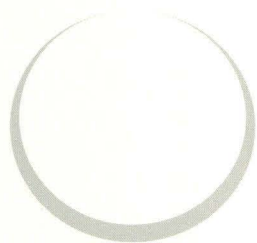
英訳……

河西良治

中央大学文学部教授

御忌会の

ゆかしさ



勝崎 裕彦

(大正大学前学長)

一

春夏秋冬の四季の移り変わりの美しい日本列島。季節の移ろいや時候の変化の微妙な風趣・情趣が、つまりは日本列島で暮らす人々の心模様や生活模様が、俳諧・俳句の季語の世界に凝縮されている。歳時記を繙くと、季節の変化が織り込まれ、紡ぎ合わされたゆかしい日本語が満載されている。言い換えれば、彩りもいろいろに、音色もさまざまに、季節を盛り込んだ日本語の宝庫が俳諧歳時記・俳句歳時記なのである。

季語の中には、仏教の年中行事や仏教にまつわる季節の言葉、あるいは仏教のもろもろに由来する動物名や植物名、道具名・用具名など、いわゆる仏教季語がたくさんある。当然、そうした季語を詠んだ俳句も多く、これに仏心・仏道心を詠み込んだ俳句を加えれば、言うところの仏教俳句のすばらしい世界が開ける次第である。

さて、浄土宗の宗祖法然上人の忌日法会は、御忌・御忌会と称されている。季語欄を見

ると、法然忌・円光忌・御忌詣・御忌参・御忌の寺・御忌の鐘・御忌の僧・弁当始め・衣裳競べ・御忌小袖・経の紐解などと並べられて関連する季語も豊富で、江戸俳諧の時代から近現代の俳句に至るまで数多くの秀句佳句を生み出している。

法然上人は建暦二年（一一二二）一月二十五日に正念往生されたので、かつては正月の行事であり、季語としては、寒さもまだまだきびしい陰曆初春の季区分に置かれていた。弁当始めや衣裳競べ・御忌小袖の季語は、江戸時代の遊山始めの正月気分を漂わせる言葉である。明治十年から陽春の好季四月に移された現行の御忌会は、新曆晩春の区分に置かれて、温かいのどかな春爛漫の中の行事ということになった。

ちなみに正徳三年（一七一三）に上梓された龐大な俳諧歳時記である四時堂其諺著『滑稽雑談』には、「東山知恩院は大谷寺と申して、吉水の坊跡にて、浄土総本寺なれば、御柏原・御奈良院二帝より、法然上人の御忌を修すべきよしの勅書はべり。その上に、当將軍家の崇信ましまして、別して御忌の式嚴重なり。その上、元禄十年丁丑正月十八日、法然を円光大師と諡し、宝永八年辛卯年五百年忌のとき、東漸と加号を賜ふ綸旨なんども、みなこの寺にて行はるるなり」と記されている。

二

江戸俳諧の御忌句といえは与謝蕪村の、

なには女や京を寒がる御忌詣 蕪村

がよく知られている。明和六年（一七六九）一月二十七日作ということ、蕪村五十四歳の折の早春の一句である。京の都の底冷えの寒さの中に、着飾った晴れ着姿の美しい娘さ

んを思い描く私である。

東山遊山ぞほとけ御忌まあり 季吟

御忌參都ぞ錦珠数袋 言水

松永貞徳門、つまり貞門の高弟として京都にあつて俳壇に重きをなした北村季吟^{きぎん}。松尾芭蕉や山口素堂^{そどう}もその門下である。池西言水^{ごんすい}は、貞享初年以降を京都俳壇で活躍し、やはり貞門派の句風を宣揚したが、それ以前に江戸にあつた時は芭蕉とも交わつた。元禄文化華やかなりし頃の総本山知恩院の御忌参りにかわる句である。

御忌也けり関八州の大廻向 露沾

内藤露沾^{いわたせん}は、磐城平藩主内藤左京大夫義泰の次男。従五位下野守に任じられて藩主を継ぐ予定であつたが、讒^{ざん}を受けて退身。しかし後に内藤家は露沾の実子が襲封することになり、一万石を超える禄を得て、いわゆる諸侯俳人の中にも抜きん出た活躍をした。もともとは西山宗因門であつたが、沾徳^{せんとく}、沾涼^{せんりやう}などの露沾門を輩出した。内藤家は鎌倉大本山光明寺の大檀越であることから、光顕院殿天誉露沾覚薬徹山大居士の法名を授けられて光明寺に葬られている。句のほうは、もとより大本山増上寺の大御忌会の盛大なありさまを、露沾の大風・大度をもつて大きく作句している。

次に近現代の御忌句――。

大いなる月の尊く御忌詣り かな女

長谷川かな女は、高浜虚子に学んだ女性俳句の先達の一人である。『枯野』を主宰した夫の長谷川零余子^{れいよし}が主唱した「立体俳句論」を受容し実践し、晩年は柔軟でおおらかな句風を確立した。法然上人の「月影の歌」を踏まえた一句である。

靴かいたうどこを小石の移る御忌詣 海道

丸山海道は、『京鹿子』を主宰した鈴鹿野風のぶろ呂の次男。もとより京都生まれの京都の人で、夫人の丸山佳子もやはり俳人である。知恩院御忌会参詣の折の一景。

すなごりの手に数珠かけて御忌詣 無量子

野島無量子は、浄土宗の大布教師野島宣道上人のことである。その生涯に作句された一句一句が念仏の心を伝える仏教俳句である。

三

今日、知恩院や増上寺をはじめとする浄土宗の総・大本山において、御忌大会の年中行事は長い伝統を正しく、しっかりと受けとめて、おごそかにゆかしく、そしてうるわしく継承されて執り行われている。もとより全国の各一般寺院においても同様である。季節は好季四月、桜前線の北上に合わせて桜花咲きほころび、若葉や青葉の茎葉の茂りもいよいよ盛んで、私たちの身と心も好風好気にさわやかに温かくなごむのである。

念仏の元祖を慕う御忌会かな

なごやかな笑顔語らい御忌の春

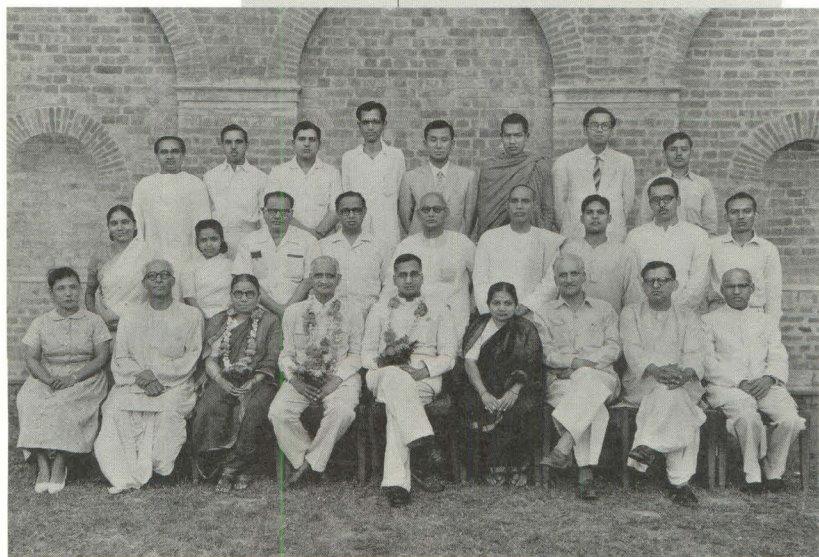
私がいづつも伝道揭示板に書く伝道句である。「お念仏の元祖さま」、法然上人を尊び仰ぎ、敬い慕う心を御忌会の仏心・念仏心に重ね合わせて深く強く正しく受けとめて、「南無阿弥陀仏」の称名念仏を高く大きく広く称えて、たゆまなくひたすらに実践していきたい。そして、いつでもどこでも、どんな場面でも、なごやかな笑顔とやさしい言葉、すなわち「和顔愛語」の精神で生き生かされ合いたい。

寺院紀行

東京・小石川

光圓寺

文・撮影／真山剛



昭和三十五年（一九六〇）、インド留学中の記念写真。上段中央の佐藤住職はデリー大学の仏教学部の第二期生で、学部には一期生、二期生合わせて、日本人二人、タイ人一人、インド人二人の五人の学生しかいなかった。

平成二十八年四月六日、浄土宗大本山増上寺で厳修される法然上人の忌日法要である御忌の日中法要に二人のインド僧が参列する。ブツダガヤ大菩提寺前住職のボーディパーラ比丘とアッサムのカルナシャーストリー比丘である。さらにタイから世界仏教徒連盟事務総長のファロップ夫妻が加わり、外国からの来賓四人が唱導師の晴れ姿を見つめることになる。

こうした来賓をお呼びした唱導師は浄土宗東京教区豊島組光圓寺第二十六世、佐藤良純住職である。昭和七年、光圓寺に一人っ子として生まれ、浄土宗の宗立校である芝学園、大正大学を出て、同大学教授、増上寺の伝宗伝戒道場の教戒師並びに教監。幼稚園や学校の理事長などを歴任、まさに浄土宗僧侶の王道をまっしぐらに歩いてこられたエリートながら、その気さくで人懐っこい人柄、そして何より大学で長く教鞭をとったこともあり、その名前は広く知れわたっている。同時に浄

土宗僧侶の中でインドに精通する第一人者で、インドへの渡航は三十有余回に及ぶ。

この佐藤住職が生まれ育ったのは、東京都文京区小石川の中台山医王院光圓寺で、その創建は天平十三年、西暦七四一年という超古利である。紀州から流れ着いた行基菩薩作の薬師如来像を祀ったのがその由来で、真言宗のお寺だったという。下って応永年中（一三九四）に江戸時代に関東十八檀林のひとつに数えられる傳通院を開山した聖岡上人が、当時荒廃していた光圓寺を中興し、浄土宗寺院となった。境内から十三世紀の板碑が出土したり、本尊が江戸六阿弥陀に数えられる阿弥陀如来で、第二次世界大戦終戦後の修復時に、寛文二年（一六六四）の修理時に胎内に収められた僧侶、武士、町民、そして女性の名前も記された念仏講衆五十八名結縁書が見つかり、そこには恵心僧都作で十世紀に造立



行基作と伝えられる薬師如来像は秘仏で、厨子に安置されている。

された旨が記されるなど、その由緒をしめす証が残っている。また、墓地には江戸時代の狂歌師であり戯作者だった狂歌堂眞顔の墓、光圓寺の最寄り駅となる東京メトロ茗荷谷駅^{みぎがたに}近くの跡見学園の創始者である明治の教育者、跡見花溪女史の墓もある。明治二十九年の東京市小石川区全図では護国寺、傳通院に次ぐ区内で三番目に広い境内地を有するなど、光圓寺は小石川、文京区はもとより、都内指折りの古刹であり名刹なのである。

また、現在は小石川で三番目の歴史を誇る大正十三年四月開園の明照幼稚園が都内での人気の幼稚園のひとつになっている。現在の園長は光圓寺佐藤良文副住職で、その園長が毎週更新するブログも人気で、毎年多くの入園希望者が集まっているという。今回の取材は平日の昼間で、この明照幼稚園の園庭を抜けて佐藤住職に会いに行った。遊び時間なのか、園庭のここかしこで園児たちがはしゃぎ回っている。その幼児たちの間を縫うように

進むと右手奥に本堂が見えてきた。その手前右手の庫裏には玄関前に池があり、その池を囲んで遊んでいる園児たちに佐藤住職が話しかけていた。

御忌唱導師の話を伺い始めると、冒頭に記したインド人の来賓の話から、大正大学大学院時代のインド留学の話となった。

佐藤住職は昭和三十七年の仏教学部助手から平成十四年の定年まで四十年にわたって大正大学で教鞭をとられ、平成十三年には『佐藤良純教授古希記念論文集 インド文化と仏教思想の基調と展開』を刊行されている。先生に伺うと、教えた教科はいくつもあって、英語に仏教学、サンスクリット語にパーリ語かな、と言うが、中でもパーリ語が専門。しかし、どの教科もその礎となったのが三年に及ぶインドでの留学で、話を伺えば何うほどインドでの体験が佐藤住職の人間観や人生



太田蜀山人に学び、狂歌四天王に一人に数えられた狂歌堂眞顔（北川喜兵衛）の墓。

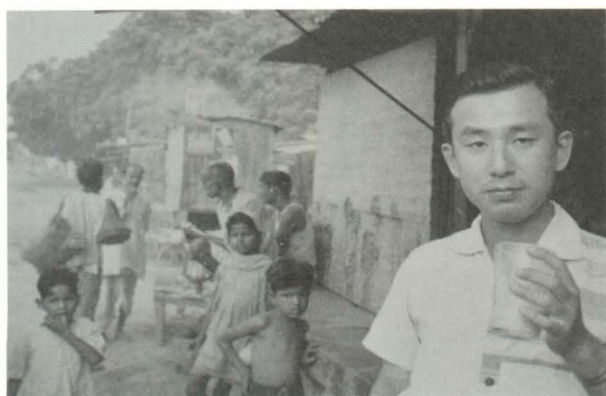
観、そして生き様の原点となったのではない
かと思われる。確かに記念論文集のタイトル
もそれを物語っているし、代表的な著書も
『ブッダガヤ大菩提寺』、『ゴータマシユダー
ルタの生涯』で、共に日文と英文で出版され
ている。

佐藤住職の原点、インド留学を経緯から伺
おう。

「留学は昭和三十四年、二十七歳からの三年
間ですね。当時はまだ自由に外国旅行ができ
ない時代でしたが、インド政府が交換留学生
として日本から毎年一人、学生を受け入れる
制度があり、決まったように東大の学生が留
学していた。それが昭和三十四年はなぜ東
大から希望者が出なかった。私は東大を三回
受験していたこともあり、その情報が入った
ので、それならお願いしてみるか、と東大の
インド哲学の権威である中村元先生にお願
いに行ったら、『まあ、君でもいいか』と運良
く許された。本音を言えば何が何でもインド

へというより、三年の外国暮らしも悪くない
か、というくらいでした」

佐藤住職のインド留学への出発と三年後の
帰国、ともに横浜港へ出迎えに行ったという、
芝学園の中高時代に佐藤住職と六年間机を並



三年間のインド生活で、佐藤住職は、庶民から
マハラジャまで、色々なインド人とふれあった。
左手に持っているのはラッシーというインドの
ヨーグルトドリンク。

べていた品川の願行寺前住職の佐藤成順大正
大学名誉教授がこう説明してくれた。

「当時の留学は超エリートに許される特権
で、浄土宗の僧侶でも数える程で、彼が最後
の国費留学生ではないかな。芝学園に入った
当日、同じ佐藤姓でしかも同じ浄土宗の寺の
息子ということで、その日から親しくなった
けれど、中高時代も優等生だったね。それに
大体お寺生まれの優等生は、寺の跡を継ぐよ
り、他にやりたいことがあるのだけど、彼は
最初からお寺を継ぐつもりだ、と言っていた」

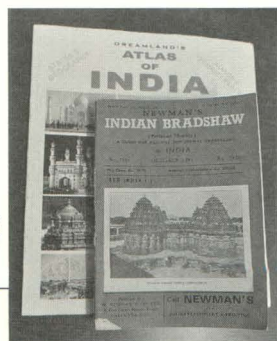
そして、佐藤住職の師僧であり、父でもあ
る良智前住職も「行ってこい」と即答して
くれたという。余談だが、佐藤住職の父・佐藤
良智師、佐藤成順名誉住職の父・佐藤賢順師、
それに鎌倉大仏で有名な高德院の前住職・佐
藤密雄師の三人は「三佐藤」と呼ばれ、浄土
宗では有名な三人の学者だった。ちなみに、
今般浄土宗から刊行される『新纂浄土宗大辞
典』にはこの「三佐藤」がそろって掲載され

るそうだ。

さて、国費留学生の話に戻ろう。
学費はインド政府から支給され、
衣食住もインド政府が面倒を見て
くれる。しかも、大学院への留学
なので授業はなく、必須なのが、
年に一回の指導教授への報告書だ
けで、デリー大学へは学費を受け
取るのを目的に適宜顔を出し、担当教授に簡
単な報告をするだけという、誠に自由な三年
間だったという。

「三年間でインド中を回りました。もちろん
仏跡はすべて回り、南はインド洋、北はカシ
ミール地方まで。当時、同じ留学生として曹
洞宗の奈良康明先生（後に駒澤大学学長、総
長）がカルカッタにいて、彼はインドに着い
た時、港に迎えに来てくれたし、その後も何
度かインド国内で会いました。インドの物価
は安いし、移動する汽車も三等車がさらに学
割で半額になったから生活や旅費にも困りま

現在は廃刊となっているインド国鉄
の時刻表と地図。佐藤住職の回りに
はとにかくインドが溢れている。



せんでした。一番お金がかかるのは書物、本だったかな」

インド中を旅する中でどこでも欠かさなかったのが本屋巡りだったという。インド哲学や仏教に関する書物を買いつけ、それが現在三万冊という書庫の中でも貴重な資料や蔵書となっている。そして、佐藤住職の大学や宗内での講義や講演、論文や各種原稿、あるいは学会での発表などにこれらが大いに役立っている。加えて、実際にインドに暮らし、各種宗教に触れ、カースト制度を目のあたりにし、カレー料理を食べ、仏跡やインド各地の空気を吸ってきたからこそ、佐藤住職のインドの話は魅力的なのである。色々取材する中で、先生の授業はすぐにインドの話になって一年間で教科書が数ページしか進まなかったと聞いたが、それもまたしかり、だろう。最後に仏教と法然上人、そして御忌にあたっての心境を伺った。

「インドは統一と多様性の国です。そして、

仏教は釈迦の教えであり、インドにある数多くの宗教のひとつだということ。日本の仏教は釈迦の説いた仏教と全く同じではなく、中国に伝わった仏教でもない。まさにこの日本という国、民族が培ってきた仏教で、中でも鎌倉仏教が花開きましたが、法然上人と釈迦の共通項は二つ。現実から逃避しないで向き合うことと、差別をしないこと。今回の御忌唱導師はその法然上人の御徳を讃えるためにも、一生懸命つとめるだけです」

その佐藤住職の唱導師の一挙手一投足を、多くの御稚児さん、多くの教え子、そして随喜寺院、さらに外国からの来賓が注目する。

この大役を無事終えられたら、今秋にはインドの日本寺に滞在予定だという。最初の留学から五十五年の間に三十回を超える渡印だが、今回は御忌唱導師での法然上人への報恩謝徳という新たな想いとともにはインドへ向かわれることになる。

(ルポライター)

佐藤住職一代で集めた蔵書はなんと三万冊。



凡夫の心は物にしたがいてうつりやすし、たとうるにさるのごとし、まことに散乱してうごきやすく、一心しずまりがたし。

〔法然上人「聖光上人伝説の詞」〕

私たち凡夫の心は物事にとらわれて移りやすく、あたかも猿のようで、実にあちこちと散り乱れて落ち着かず、一つの境地に心は定まりにくいものです。

申年にちなんで——人間の智慧とお猿さんの智慧——

昨年末、とあるテレビ局から大正大学に「五郎丸ポーズと同じ手の形をしている仏さまについて教えて下さい！」という問い合わせがありました。ご存じのように、ラグビーワールドカップ日本代表の大躍進と共に、五郎丸歩選手が、顔の前で両手を合わせ、人差し指を立ててゴールキックする姿に注目が集まり、「五郎丸ポーズ」として流行語大賞トップテンにも選ばれました。程なくして、岐阜県関市・関善光寺の宝冠大日如来の印相が「五郎丸ポーズ」と酷似していると話題になり、テレビ局から「仏教学の先生に解説して欲しい」と依頼があったのです。とはいえ、密教の本尊である大日如来は、通常、智拳印（金剛界）か、法界定印（胎藏界）かのいずれかを結んでおり、本学の先生方のお智恵を拝借しても、「深い意味はありません」という結論となりました。

実は、五郎丸さん自身も、メンタル面を強化してプレーの精度を上げるルーティンの一環として、あのポーズをとっているだけで、「そんなに意味はありません」と説明しています。何万人もの観衆が集うスタジアムでプレーするのは大きな緊張感を伴います。特にキッカーは、プレースキックの瞬間に会場にいるすべての人の目が集中するので、そのプレッシャーたるや計り知れないものがあるでしょう。古来、仏教では、戒↓定↓恵という三学の流れを重視しま

す。それを五郎丸さんにあてはめれば、「五郎丸ポーズ」で姿形を整えて（戒）、緊張をほぐして心を集中し（定）、本来の実力を発揮して適切な結果を導き出す（恵）という流れにあてはめられそうです。私達も「手の平にへん」という字を三回書いて飲み込む」「聴衆をカボチャだと思う」等々、冷静な気持ちで本来の実力を発揮できるよう、自分だけのルーティンを用意しておきたいものです。とはいえ、五郎丸さんのように、なかなか物事をうまく運べないお互いであるというのが偽らざる現実です。

さて今年は申年です。日本昔話の一つ「桃太郎」には、はかなくてもろいけれども、清浄で、かつ、かけがえない命を象徴する桃太郎と、死を象徴する鬼が登場します。また桃太郎には、勇気を象徴する雉、忠義を象徴する犬、そして、智恵を象徴する猿が必要だ、と説かれます。なるほど、世界的にも有名な日光東照宮の三猿は、そんな智恵の一端を私達に伝えています。すなわち「見ざる、聞かざる、言わざる」をかたどった三猿は「悪いものを見るな、悪いことを聞くな、悪いことを言うな」と、日々の生活を正しく、より良く過ごすための智恵を示しています。もちろん「目も、耳も、口も」ある私達ですから、「見ず、聞かず、言わず」に生活することなど不可能で、三猿の姿は「正

しく見る、正しく聞く、正しく話す」と受けとめることに他なりません。

こうした三猿の姿は、『般若心経』の「無眼耳鼻舌身意、無色声香味触法、無眼界乃至無意識界（眼や耳や鼻や舌や身体や心といった感覚器官にかたよらず、それら感覚器官の対象となる姿形や音や香りや味や触覚や法にこだわらず、その両者によつて構成される世界にもとらわれない）」という教えに通じ、智恵の世界に至る道筋を優しく私達に教えてくれるのです。ちなみに、曹洞宗祖道元禪師は、あたり前の事実を、ありのままに捉える智恵の言葉として「眼横鼻直（眼は横に、鼻は縦についている）」と明示します。

そうした流れの大切なことを熟知した上で法然上人は、「私達の心が散り乱れないようにと願ったところで、生まれついで目や鼻を取り捨てることなどできないようなものです」（「明遍僧都との問答」）と明示になり、この世が娑婆である以上、目や鼻の働きを上手にコントロールして（戒）、散り乱れる煩惱の心をなくし（定）、常に正しくあり続けること（恵）は、自力では到底不可能なこと、と吐露されました。そして、冒頭のご法語のように、人間の小賢しい智恵とお猿さんのいわゆる猿知恵とを重ね合わせて、そんな私達にも修められるお念仏を懇切丁寧に説き広めて下さったのです。

合掌（林田康順）

江戸の川を
を歩く

第二回

江戸ウォーカー

森清鑑

家康の大構想

一五九〇年、家康は江戸地に来て、その自然の風景に驚愕する。そこは、武蔵野台地と湿地帯。多くの河川が流れ込み、江戸湾が入り込んで迫っている。人が住めるところが少ない。環境的には、洪水の危険が常にある。しかし、美しい風景。この台地と水と湿地帯の世界をどのように切り開いていくか。それと、中核をなす江戸城の様子はどうか。家康から見ると、太田道灌以来の江戸城は、西国の堅固な城とは比べものにならず、海縁にへばりつく、貧弱な砦のような存在である。

しかし、ここから彼の大構想が展開される。理想的な大都市建設。それに沿って、以後七十年に亘る天下普請が始まる。家康に次ぐ、歴代の将軍、有能な家臣がこの大テーマに心を一つにして取り組み始めたのである。大都市、大江戸の姿を夢見て。

それは一言で言えば、台地を切り崩し、海を埋め立て、住む陸地を広げる作業であり、河川の流れを変え、大規模で、合理的な水の流通運搬路を創造すること

ある。その上で、過去の歴史にない大型城郭の建設が待っている。

塩の運搬路

道三堀、日本橋川、小名木川、新川を造る

まず、家康は、城建設には見向きもせず、家臣や全国から集まる人々のために、安定した食の確保を目指す。そして、当時の江戸城からは、全く遠くに存在している、関東最大の製塩地、行徳に目をつけ、ふんだんに塩を確保するルート造りから始める。この時代、塩は現在の石油にも匹敵する生活必需品。そこで日比谷入江の北端に流れ込む、平川河口から江戸前島の北部を掘削。これが、道三堀。繋げてそのまま、横一線に日本橋川を整備。隅田川へ出ると、眼前は、広大な湿地帯、深川。渡って、そのまま江戸湾に沿って、運河、小名木川を掘削。さらに中川を渡って新川を掘る。かくして、行徳から横一線で江戸に塩を運べる運搬路を完成させる。この人工の水路は、海よりもずっと安全で、安定的な輸送路となる。塩だけでなく、豊かな穀物の重要な輸送路。

道三堀を、江戸前島を今の新橋方向に掘削してできた外堀に繋げる。ここに平川流路からの水を入れる。

神田川の創設

慶長十年、隅田川と神田山まで神田川創設。江戸湾に流れ込んでいた石神井川を遮断し、神田川と繋げ、隅田川へ。さらに神田山を削り西へ延長。縦に流れる、平川、小石川を遮断し、神田川へ呼び込む。平川の一部流路を外堀に繋げる。神田川は、その先、水源、井の頭池、善福寺川合流の流れと結びつける。この川は、江戸核心部を守る、北の外堀の役目を果たし、大きな輸送路ともなった。

利根川の東遷

家康の見る目は、大きい。当時、板東太郎と呼ばれる、利根川本流は、銚子ではなく、江戸湾に流れ込んでいた。この本流を銚子に付け替える大工事を企画。一五九〇年、江戸に入った家康は、早くも一五九四年には、この大利根川の東遷事業に着手する。これがある

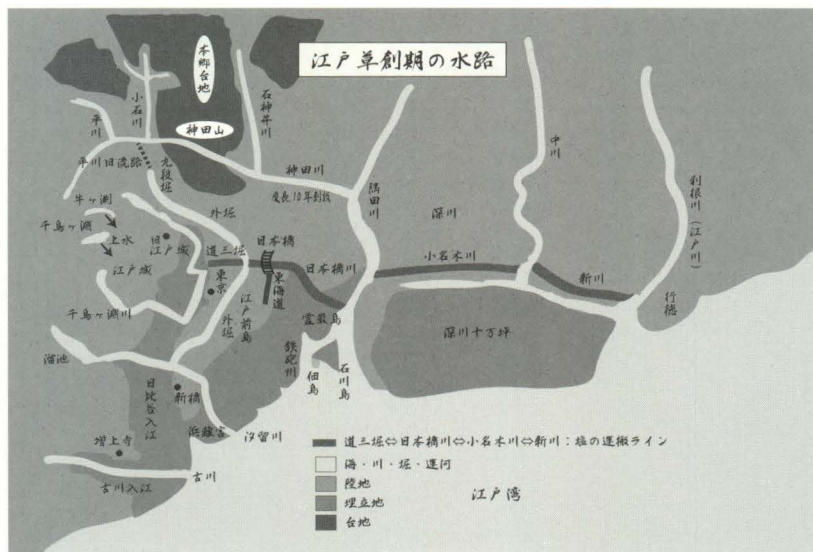
名な利根川の「瀬替え」。この大工事は、六十年の歳月を要し、一六五四年に完了する。本流の関宿から江戸湾に注ぐ、支流を造り、江戸川とする。さらに、以前の江戸への流れ（古利根川）は、分脈化され中川となる。この大規模な利根川東遷事業の結果、江戸は、洪水から守られ、北関東に向けての、大外堀を得、北への水運路を獲得し、周辺は農作物肥沃地帯と化する。

汐留川、古川、目黒川の整備

溜池を通じて日比谷入江に流れ込んでいた汐留川は、入江埋め立て地を掘削。南北の外堀と繋げ、浜離宮に流される。

増上寺南を流れる古川（江戸期…新堀川、赤羽川、澁谷川）は、家康入府時、大きな入江を形成していたが、これを埋め立て、河川と成して、増上寺を守り、西へ。

さらに南の目黒川は、品川湊を蛇行して入り、品川宿場町を造成する。南の玄関口とする。したがってここに本陣を敷設。さらに多摩川を江戸全体の南防衛ラ



インとして整備。

江戸城郭内に、牛ヶ渚（北の丸公園）と千鳥ヶ淵を造成し、その湧水を、城内の上水（飲料）として利用。

埋め立てと運河造り

江戸前島の東西の海を埋め立て

まず、武蔵野台地を削り、日比谷入江を埋め立てる大工事（慶長十一〜十二年）に着手。家臣が住む、広大な敷地を確保（大手町、日比谷）。結果、江戸前島と一体化。今度は、江戸前島の東側の海を靈巖島まで埋め立て。そのまま南へ、鉄砲州、浜離宮に至る埋め立て地を造成。結果、家康入府時には、広い江戸湾に、ぼつりと浮かんでいた佃島は、鉄砲州の目と鼻の先にくる。この埋め立て地に自在に、堀・運河を造る。

大規模な江戸湾の埋め立ては、長い、東西塩の運搬路をそのまま江戸湾に向け進展。こうしてラインの東では、深川十万坪、六万坪（木場）を完成。広くなつた、両国から深川の地に、縦横、運河を巡らせる。

かくして、水の都、江戸ができていく。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第六十七回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

またまた遠のいた帰国



仙人篤志家の支援に失敗するも

渡辺海旭は、足かけ八年におよぶ留学生生活の総仕上げを土産に故国に帰るべく、ユダヤ系フランス人の篤志家アルベール・カーンに援助を求めんと企図したが、カーンと親しい畏友・姉崎正治の仲介もむなしく、それは不首尾に終わった。

いわば最後の最後と願い定めた頼みの綱がぶつかりと切られてしまったのだから、ふつうなら、これからどうしたものかと、暗澹たる絶望の底で途方にくれるはずである。「はず」と記したのは、実は、海旭が落ち込んだのも一時のことで、その後は途方にくれる様子がさっぱりない。ないどころか、それから早々と立ち直って嬉々としている感すらあるのだ。

まったく渡辺海旭という主人公はあつかいに困る。史実にしたげれば、かくも出口なしの状況に追い込まれながらも、なんとその後、

二年間もこの地にとどまりつづけるのである。いったいぜんたい何という男なのか。

ここで筆者の深奥の逡巡を読者諸賢に吐露する不調法をご寛恕ねがいたい。が、正直なところ、渡辺海旭という人物がさっぱり分からなくなった。この先どう描いたらいいものか、はてさて困った。

しかし、三文であつても物書きの端くれなら主人公を筆先で抑えられなくてどうすると氣をとりなおして、帰国をめぐるなんとも「浮世離れ」した海旭のふるまいを、今一度、読者諸賢と共に整理しながら考えてみよう。

いまや海旭のふところは「火の車」である。ひとつには、宗門からの「仕送り」は一年前に途絶えてしまっているから「入り」は零である。宗門としては四年の約束で送りだしたのに、海旭はまだやり残したことがあるといつて二年の留学の延長を申し出てきた。留学先の師であるロイマン教授の口添えもあり、宗門も渋々受け入れたところ、それも反故に

され、さすがに「示し」がつかないと判断したのだろう、「仕送り」を打ち切ったのは、ある意味では当然の措置であった。

かくして「入り」が零になってしまった海旭だが、霞を食っては生きられぬ。そこで周囲の友人知人から借金したのは生活費だけではない。海旭には場合によっては三度の食事よりも大切な「生活必需品」があった。それはビールとオペラと、とりわけ研究文献である。やれ貴重な文献がベルリン大学にあると知ればそれを求めて列車に飛び乗り、やれケンブリッジやオックスフォードに稀覯本があると聞けばドーバー海峡を渡る。そうした資料収集に金の糸目につけない癖は、「仕送り」が切られてからも、いっかなおさまらない。したがって借金はますますふくらむばかりであった。

留学七年にして博士号を取得したものの、それは幸か不幸か（正確に言えば、海旭はともかく海旭を送り出した宗門には「不幸」な

ことに）、帰国を促す契機とはならなかった。むしろ博士論文を仕上げる過程で、原始仏教の根幹の一つをなす密教への学問的傾倒をいっそう募らせたのである。折しも、欧米各国の探検隊が中央アジアで貴重な仏教経典の断片を発見しては母国へ持ち帰る「朗報」が相次いでいた。そして、その解読の仕事が海旭にも舞い込んできた。そんな天から降ってきたまたとないチャンスの前にしておめおめと帰られようか、それが海旭の偽らざる心境でもあった。だが、この地に留まりつづけるだけの資力が底をついた。それどころか、長年の間の負債が積もりにつもっていた。

そこで海旭の頭に浮かんだ秘策がカーンへの財政的支援の嘆願であり、海旭が申し入れた額は、密教研究の総仕上げための費用に加えて、それまでの借金と帰国費用を合算した「邦貨金二千五百円也」——現在の価値にすると、七百万円／＼八百万円であった。

しかし、詳述したように、カーンからの支

援はご破算となった。そうなれば、ふつうなら潔く諦めるしかないだろう。ましてや江戸っ子気質の海旭ならなおさらだ。ところが、こと学問研究については恋々として諦める気配がさっぱりなかった。

宗門と姉崎にも「財政支援」を無心

そんな執着心からか、おどろいたことに海旭は、カーンに借金を断わられてわずか二か月も経っていないのに、今度は宗門に対して無心に及んだ。名目は、五月にロンドンで開催される「世界比較宗教史会」と、その二か月ほど後にコペンハーゲンで開催される「第十五回東洋学会」に参加する費用を求めたのである。前者は、有力宗教史の研究者が世界中から初めて一堂に会する画期的な会議で、日本人としては畏友の姉崎正治、そして長年アメリカにあつて禅を世界に知らしめた鈴木大拙も参加して発表を行なうことになっていた。いまや世界的な禅研究の第一人者として

評価の高い鈴木大拙からは、昨年来、新史料を郵送で提示されて見解を求められていたこともあり、海旭としてはぜひロンドンで直接意見交換をしたいと願っていた。また後者の「東洋学会」は、海旭も解説を手伝った、かつて新疆に存在した古国・于闐^{ツタン}から出土した古文書についてロイマン教授が発表をすることになっていた。どちらの学会も海旭の密教研究を深めるために重要な場となるはずだった。

しかし、それを宗門に求めるのは、どうみても無理があつた。実は昨年末、宗門から、荻原雲来と並んで、「大僧都、教師補講師」に任ずるとの有難い通知があり、「浄土教報」にも告知紹介されていた。これは海旭が博士号を取得したことへの「報奨」であると同時に、帰国を促す宗門の意思の表われでもあつたが、あるうことか海旭は、「いましばらくは研究のためにこの地に留まるつもりなので辞退する」と書面で返したのである。その上で、金の無心をしたのだから、宗門が海旭の

申し出を受け入れるはずもない。筆者ですら理解に苦しむ「浮世離れ」した振る舞いといわずに何という。

さらにおどろいたことに、海旭はカーンへの仲介でさんざん負担をかけた姉崎にも借金を申しこんだのである、それも一度ならず二度にわたって。それでも有難いことに姉崎は、一度目は「急場しのぎ」としてとりあえず十ポンドを用立ててくれた。当時の十ポンドは、現在の大工の日当に換算するとなんと百九十万円を超える、学者にとっては大金であった。だが、それも二カ月足らずで費消してしまふと、海旭は再び次のような無心の手紙を書き送るのである。

「囊中頗る困難を極む 老兄には曩に一方ならざる辛勞を煩し今亦厚誼に訴へんことは恥を知らざるに似たれど若し今余裕あらば応急の策とし八月上旬まで英貨十五磅乃至一時恩借叶はざるや（略）幸にして高諾を得ば正金銀行に令して十四五日頃までに廻送を勞した

し 二カ月の分と合せて先に記したる期限までには必らず返済の務を完ふすべし」

先に借りた十ポンドも返さぬうちに、また借金を申し込むとは、これまた筆者ですら理解に苦しむ「浮世離れ」の業だが、仏ならぬ姉崎の顔も二度までだった。この二月の間に姉崎の身边に重大事件が起きたのである。完成間際であった「四阿含研究」の草稿が自宅の火事で焼失してしまったのだ。姉崎の返信でこの重大事を知った海旭は、以下の詫び状をしたためる他なかった。

まずは草稿消失に「学人にありては愛妻を哭し愛児を悼むの哀にも比べるべし」と大いに同情を寄せながら、さらに草稿とも関連する學術技芸の支援に対する姉崎が教鞭をとる東京帝国大学の姿勢について、「世に活くる金と死する金あり。大学が役にも立たぬ死金には費を惜まず。今回の如き有益にして邦家の学芸を紹介する機会を逸するを惜しむなり。老兄心事の齟齬の為に痛むと共に亦帝国大学

のために頗る哀む」と大いに嘆いた上で、こう詫びを入れたのである。

「老兄の財事の内容を洩さるゝに及びて弟は頗る老兄を煩はせしこと過大なりしを悔い且つ恥ぢぬ。大橋氏にして老兄の意に充たらむ程の俠を示さざる限りは願くば再び僕に對して貴意を勞せざれ。何とか都合して此難関を逸脱する工夫つくべし」

なお「大橋氏」とは、当時日本屈指の出版社で、創業時には海旭も小僧を務めたところがある博文館の総支配人の大橋乙羽のことである。姉崎とも昵懇だったため、自宅の火災もあつて手元不如意の自分に代わつて用立てを依頼したが断わられたと知つて、そこまで誠心誠意を示してくれた畏友にさすがに海旭も深く詫びを入れたのであつた。

明治人は楽天家であつた!?

筆者の理解を苦しめる海旭の「浮世離れ」の業は、これだけでは終わらない。宗門と姉

崎からはこれ以上の支援はまったく期待できないとなつては、もはや万事休す、さすがの海旭も意氣消沈して、帰国のための旅衣を整えにかかると思つたところが豈^{あにはか}諸らんや、恥も外聞も振り捨てた無心の書状を姉崎に送るいっぽうで、姉崎とは対極の盟友にして仏教改革運動の同志でもある高島米峰には、こんな手紙を書き送っているのである。

「去年の冬から慘酷に財布が空だつた。然し錢がないと交際をする世話もなく、手紙を書く必要も生ぜず。酒を飲むことさへ全く入らず。一向三昧に古文に親しむことが出来て、自然に戒律を守る。アソルートに無錢だと、雲照和尚の一食の真似などは屁でもない。何でも坊主や学者は錢なしに限る」

(つづく)

浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

●回

〈特選〉春一番回転ドアに閉鎖札

浜口 佳春

立春を過ぎて初めての南の風だが、これが殊のほか強いのである。回転ドアはあまり頑丈でないから、別のドアを使うように指示する。このドアは年に何度か閉鎖することがあるのだろう。

〈佳作〉春寒し回転寿司の無地の皿

和田 英二

夏みかんたわわに父の三回忌

長谷川 裕

回復の遅き足持ち日向ぼこ

増田 信子

●復

〈特選〉復元のテイラノザウルス風光る

齊田 仁

復元とあるから、多分原寸の大きさだろう。とすると全長十五メートルほどもあるから、大変なものだ。動くようになっていて、声も

出る。などいろいろ頭をめぐらすことができる。「風光る」がよい。

〈佳作〉復元の五重塔や鳥帰る

冬の日の駅伝復路応援に

小林 苑を

勢力ふき子

球友の回復を待ち青き踏む

井村 善也

●自由題

〈特選〉富士見ゆと放送ありき冬の旅

真野

龍

鉄道や自動車の旅でなく、これは航空機だろう。遠く富士山が見えるという。放送があつて一同等しく窓をのぞく。雪を着た富士の姿は、いつ見ても飽きることがない。皆の満足げな顔が浮かぶ。

〈佳作〉浮かれ猫かつてロック座フランス座

優木 果穂

幾山河越え来て鶴の恋の舞い

石原 新

目つむれば春風我を包みけり

池田 伊吹



FORUM
浄土の広場

浄土誌上句会のお知らせ

兼題

へそ

対話

自由題

誌上句会〈編集部選〉

■回

三寒四温とどまれば死ぬ回遊魚
みんなして魚氷に上る回顧展
この頃は梅咲く角を回りけり
春連れて紙飛行機の旋回す
ため息のとどきて回る風車
回鍋肉たつぷり盛られヒヤシンス
梅の香と回覧板が届きけり
回診の足音のして春隣
回送か空車か紅く寒明ける
妹の回すは母の春日傘

遠山栄二
内藤隼人
井口吾郎
小林苑を
工藤 掉
鳥羽 梓
井口 栞
袖岡志野
祐天三郎
仁科遼一

締切・二〇一六年四月十日

発表・『浄土』二〇一六年五月号

選者・増田河郎子（『南風』主筆）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■復

寒明けのビンタに往路復路あり
復讐は赤色なりし落椿
恋猫の増え復興の港町
壁掛けの絵風にながれの復元図
夏蜜柑ごつごつお寺修復中
往復の道変えてくる通い猫
復旧の単線に降るぼたん雪

笠井亜子
工藤 掉
牛島裕子
宮野愛美
近藤圭子
原田亜美子
長谷川 裕

■自由題

煙舞う豊供養の春の寺
遠き世の都の春や千代の琴
成り行きに任せてゆかん恵方道
トロ箱にアロエと梅の咲きにけり
座布団の膨らんでいる梅の寺
石の猿石の狐や春匂う
ガラス器にアルミの蓋や日脚伸ぶ
春容のまことに厚き玉子焼
教室の上と下から早春風
かたまりてなにやら謀反めく菫

真野 龍
飯島英徳
佐藤雅子
長谷川 裕
石山美紀子
鳥羽 梓
目黒明宏
宮島瑠美子
青山百合子
柴田陽造

さっちゃんねネッ

129 かい目

かまち♡ふしろう



かまちよしろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。
 福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞

(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞)



編集後記

晴れ晴れとお祝い心地の御忌会かな 岱潤

本誌も今月号より体裁を一新しまして、三度目の再スタートの気概です。内容の充実をより一層はかり、読者の好奇心が落胆しないよう努めますので、これからも引き続きご支援をよろしくお願い致します。

先日統計数理解研究所の国民性調査を見ていたら、平成二十五年と昭和三十三年の比較が出ていました。そこで一番興味のある「あの世」を信じているかの問いに、「信じる」と答えたのは、平成二十五年は二十歳代が四十五%、五十五年の昭和三十三年は十三%と三倍も増えて

いるのに驚きました。しかし七十歳以上となると、昭和三十三年では三十七%だったのが、平成二十五年では三十一%と減っているのです。

これはどのように理解したらいいのでしょうか。死をまだまだ意識しない二十代の若者にとつては、「あの世」はバーチャルな架空の世界ですが、それはアニメの世界と同様で、あつてほしい夢の国なのかも知れません。しかし七十代以上ともなると、死が現実化してくる身近な存在となり、逆に恐怖としてまだまだ見たくない世界のものとなつてしまうのでしょうか。それにしても若い世代に以前より三倍も「あの世」に興味を持つている統計は

うれしい結果です。いろいろな世代の方がお坊さんとの会話を望んでいるとの声もよく聞きます。私たち僧侶がもつとつと門戸を広げてゆく必要があるように思います。(長)

編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十二巻四月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十八年三月二十日

発行 平成二十八年四月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四七四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三七八)六九四七

FAX 〇三(三三七八)七〇三六

振替 〇〇一八・八・八二八七

雑誌『浄土』 特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森厳寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多敬義(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山・清浄華院)
拙博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

され、カーンからの資金援助の仲介を姉崎正治に依頼していることを、とつおいつ打ち明けはじめた。

「で、脈はありそうなの」と夫人が話の途中で訊ねた。

海旭は、夫人が冒頭で持ち出したワグナーをたとえに引いて説明を加えた。

「わがワグナー翁は、ドイツからバリへ亡命を余儀なくされたとき、愛犬を葬う金さえないほど困窮していたそうですが、それを救ってくれたのがチュエリッヒの豪商ヴェーゼンドンク夫妻でした。そのおかげで、長年構想を温めていたあの『トリスタンとイゾルデ』が完成をみるのです。私にとっては、銀行家で篤志家のカーン氏は、いわば豪商ヴェーゼンドンクのような方であってほしいと願っております」

「あら、ワグネリアン・ワタナベらしい譬えだこと」と夫人は返した。「でも急に元気がでてきてよかったわ。やはり、ワタナベの心

の葉にはワグナーが一番ね。さあさあ、ワグナーと同じぐらい大好きなビールをお飲みなさい。もっと元気がでるはずだから」

夫人から盃を受けると、海旭は一飲みに乾してつづけた。「私のような非才を大楽才になぞらえるのは、はなはだ僭越至極ではありますが、カーン氏から支援をうけることで、ロイマン先生の薫陶をうけて進めている、サンスクリットの原典の比定と解析を完成させたいのです。そして、その学術的成果を手土産に晴れて故国へ帰りたいと」

満足げにうんうんとうなずくだけのロイマン教授をちらりと見やつてから、夫人は、座をいっそう盛り上げようとしてか、まぜっかえした。

「あなたがワグナーで、カーンさんという奇特な銀行家が豪商ヴェーゼンドンク、そしてさしずめ主人との大研究が、『トリスタンとイゾルデ』ということは、あなたはカーンさんの奥方と昵懇ということなのかしら」

「めっそももない」と海旭は激しく手を左右にふると真顔で否定した。

夫人のたとえ話には、ワグネリアンなら誰でも知っているこんなスキャンダルが下敷きにされていた。すなわち、困窮の極みにあったワグナーの支援に熱心だったのは、実はチューリッヒの豪商よりもその妻マティルデであり、それは彼女がワグナーとわりない仲にあったからだった。そして、それがばれて、ワグナーは妻のミンナと別居するはめになるのである。

「まあ、ワタナベは独り者だし、ワグナー先生のように家族を失うことはないでしょうから安心ですけど」と夫人は笑い声をたてた。

ロイマン教授から秘策の提案

それまで黙って二人の会話を静かに聴いていたロイマン教授だったが、さすがに石部金吉先生としては黙っていられなくなったのだろう、コホンと空咳をすると、二人の会話に

割って入った。

「カーン氏は、フランスのみならずヨーロッパで、また実業界だけでなく我々のような知識層にもよく知られた大立者だ。こういった君の畏友であるアネザキ君には失礼かもしれぬが、彼に仲介役を頼むのはいささか荷が重すぎるのではないかな」ここで教授はビールで喉を潤してから、言葉を継いだ。「そこで、私も君のためにひと肌ぬこうじゃないか」ロイマン教授はそういつてから、次のような「二の矢」を放つ提案した。

現在自分が指導教官となつて、愛弟子で博士号を取得した渡辺海旭と共にすすめているのは世紀の大研究なので、ぜひとも援助をしてほしいという趣旨の嘆願書をカーン氏宛てにしたためる。さらに効果をより確かなものにするために、カーンの母国フランスで印度学の泰斗として知られるシルヴァン・レヴィ教授にも書を送り、レヴィ教授からもカーン氏へ嘆願をしてもらおうというものだった。

レヴィとは、海旭が四年前スイスはバーゼルで開催された万国宗教歴史学会に単身で臨み「現代日本宗教の立ち位置」のテーマで研究発表を行なったときに、知己を得ていたので、必ずや側面援助を買ってでてくれるはず、というのがロイマン師の読みだった。

これだけでも十分にありがたい提案であったが、さらに海旭をおどろかせ、喜ばせたのは、ロイマンから直接カーンに書状を出すのは、姉崎の顔をつぶすことになるので、カーン宛ての嘆願書は姉崎に送り、姉崎からカーンに渡してもらったかどうかという、実に深謀遠慮に富んだ策であった。

それにしても学者肌のロイマンからこんなにも世知にたけた策がでてこようとは、思いもよらなかった。

夫人もそう感じたらしく、「あら、あなたからそんな素敵なアイデアがでてくるとは、驚きだわ。善は急げよ、あなた。さっそく書斎でお手紙をお書きになって、ワタナベへの

今夜のお土産にしてあげてくださいな」

といって、夫を促した。

待つこと半刻。ロイマン教授は、カーン宛てとレヴィ教授宛ての二通を仕上げて戻ってくると、それを海旭に手渡した。

姉崎への追伸に賭ける

ロイマン宅を辞した海旭は、下宿先のアパートへ戻ると、さっそく姉崎正治宛てに追伸をしたためた。まずはロイマン師からの提案の概要を説明し、師直筆の「嘆願書」を同封するのでこれを大いに活用してほしいと記した上で、こう謝意を陳べた。

「事就らむか 僕には再生の思といふべし憂悶に眠り煩勞に瞑せる身の再び起ちて嗚呼日嗚呼光と呼ばむことブリュメヒルデの如くなるべし 就らざらむか 僕一も憾あるなし。僕が最も愛敬して道を語り文を論ぜむと心に誓ひし老兄を終生忘るべからざる 恩あ

る吾が師、之に平素景仰欽慕せる 一同労者の僕が為に盡して而して就^ならずんば是命なるのみ。僕は既にこの盡力とこの恩情にして充分の慰藉と光榮を有せり。豈他を望まむや」

ブリュメヒルデは発音的にはブリュンヒルデと表記すべきだが、ワグナーの最大傑作の一つ「ニーベルングの指環」が題材に求めた北欧神話で波乱万丈の運命をたどるヒロインである。海旭は、またまたワグネリアンぶりを発揮、わが身をそれに託し、首尾よく事が成就しようがしまいが、姉崎の恩情は終生忘れないとわが身を預けたのである。

もちろん、姉崎が海旭に勝るとも劣らないワグネリアンであることを知っての上の修辭と引用であつた。そうそう、そうだった、今週末に当地のオペラハウスで、『ニーベルングの指環』の『神々の黄昏』が演じられる、これはぜひとも姉崎に伝えておかなければならないと内心でつぶやくと、

「この雄大悲壯の曲は幾度見幾度聞くも飽かず。往きて見ばやと思う」

と記して、ペンをおいた。しばし天井をあと、さてこの追伸をどうしめようかと思案した。前便のように、あまりにも悲壯感を漂わし嘆願調に走るのは、姉崎に負担感を抱かせて、かえって逆効果になるのではないか。ここは肩から力をぬいてさりげなく軽みをもつてしめたほうがいいと思つた。

と、玄関の上がり口にある新品の靴に目がついた。そうだ、こいつにひと仕事をしもらおうとペンを取り直した。

「昨夜靴を捨て^{おろ}りぬ。三年來僕に事^{つか}へたものの多少の感あり。駄句三つ就^なる。

雪どけに 夕^{ゆふ}破れ靴 あはれなる
破靴嘆ず 事^{こと}て了^おりぬ 雪どけに
やぶれ靴 煙側意を負ふ 馬將軍」

わが足元を護持してくれた三年にあわせて三句としゃれてみせた。この駄句に姉崎が思わず笑って、それで姉崎が自然体となってカーンにあたってくれれば、よりよい結果が得るのではないか。そんな勝手な想像をたくましくすると、現金なもので、なんだかすべて事がうまく進みそうな気さえしてきた。

暗転、失意の底へ

しかし、残念ながら、この迫伸は意味をなさなかった。それから三日後、郵便受けを覗いてみると、姉崎から書状がとどいていたのである。前便同様、シベリア鉄道経由の特急便で送りしたが、さすが三日では、今頃はせいぜいバイカル湖あたりを列車にゆられているはずである。ということは、ロイマン教授による乾坤一擲の策は姉崎には届いておらず、無為に帰したことになる。

海旭は嫌な予感を覚えたが、いやいやこん

な策を弄さずともカーン氏から承諾がでたのかもしれないと思っておして、その場で開封したところ、嫌な予感のほうの中していた。姉崎の書状には、概略次のように記されていた。

貴兄の窮状を忖度するに事は緊急を要すると考え、貴兄の了解を得る前に、カーン氏に貴兄の学問的実績と現在の取り組みの画期性と窮状を説明して資金援助を打診したところ、残念ながら要請には応じられないとの回答があった。そこへちょうど貴兄からの切実たる嘆願依頼が届いた。よかれと思ってやったことが勇み足になってしまい、まことに申し訳ない、という内容であった。

なんと、渾身をこめた前便すら役にたっていなかったのである。ああ、なんたることか。姉崎によると、海旭への資金援助に応じられない理由は、以下のとおりであった。カー

ンが資金援助をしているのは「世界周遊奨学金」制度で、青年たちに机上の学問から離れて、世界各地を周遊することで見聞を広めてもらい、将来にむけて有為な人材を育成しようというものである。したがって「仏教原典の比定」はその趣旨にはあわないと。

姉崎も海旭も知りようもなかったが、実はカーンは当時もう一つの大きなプロジェクトを準備中であった。それは「地球映像資料館」と名付けられ、世界中にカメラマンを派遣して世界各地の日常生活をカラーフィルムで記録しようという、「世界周遊奨学金」を超える壮大な企画であった。それは海旭が資金援助を嘆願しようとした年の翌年、一九〇九年（明治四二）にはじめられカーンが破産して全財産を失う一九三一年（昭和六）までつづけられる。

いわば「世界の記憶の貯蔵庫」であり、十八世紀に勃興したヨーロッパの啓蒙主義を具現化した一種の百科全書である。その中には

明治、大正、昭和期の日本の庶民生活を活写した貴重なカラー写真も含まれる。まさに百年後に高い評価を得ることになる歴史的事業であった。

そもそもカラー写真がフランスのルミエール兄弟によって発明されたのがつい前年の一九〇七年であり、当時は極めて貴重かつ高価なものであったことを考えると、カーンの決意たるや尋常ではなかった。海旭の資金援助の嘆願に心惹かれなかったのは仕方なかったといえよう。

かくして起死回生を願った海旭の企図は、一月以上にわたって翻弄された果てに、烏有に帰したのである。

さて、いったいこれからどうしたらいいのか。暗澹たる絶望の底で途方にくれる海旭であった。

（つづく）



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。



浄土誌上句会

●成

〈特選〉成人式母が遠くで見えておりぬ

増田 信子

市町村の行う成人式だろう。大人になったのだからとはいえ、まだ母がついて行くことがあるのだ。本人が来なくてよいと思っても、これまで育てて来た母にとっては、晴れの姿を見届けたいのである。

〈佳作〉待春や音立てて焼く成吉思汗

斉田 仁

日光御成街道を来し猿廻し

和田篤郎

犬小屋の落成ほどのおらが春

新藤英治

●人

〈特選〉どんど火や人垣潜り餅を焼く

井村 善也

小正月に松飾りなどを焼くのだが、その火で餅を焼いて食べるのは、何とも言えずいいものである。その餅を焼くのに火を囲んでい

る人垣を分ける。いかにも正月らしい空気が
感じられる句になった。

〈佳作〉

冬の夜の無人で昇るエレベーター

安西智也

人日やカレーの好きな日本人

宮口玲二

初伊勢の人で混みあう神楽殿

吉崎美和子

●自由題

〈特選〉

触診の女医の冷たき指の先

浜口 佳春

この頃機器の発達によって、触診などとい
うことが少なくなってきた。それでも全く機
械に頼るという訳にはいかない。触診の指先
の冷やりとするのを感じながら、女医に全て
を任せているのである。

〈佳作〉

日脚伸びる社務所の裏の竹箒

斎藤 信

習いごとひとつ減らして初稽古

坂倉一光

悴みし両手をすりて日の出見る

強力ふき子



兼題 回復自由題

浄土誌上句会の
お知らせ

誌上句会 〈編集部選〉

■成

成程が口癖酔海鼠をすする

梟の鳴いて夜空の完成す

淑氣満つ成人映画専門館

初市に石田三成回顧録

老人の光合成の息白し

熟成のワインを抜いて屠蘇とする

去年今年一気呵成の去年今年

構成を変えて二日の節料理

成らぬこと成らぬ患方の迷い道

西嶋 順
三島曜子
水島 透

■人

人並みに餅がうれしく伸びにけり

工藤 掉

締切・二〇一六年二月八日

発表・『浄土』二〇一六年四月号

選者・増田河郎子 (『南風』主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

人日の坂上る人下る人

人に押され人に並ぶやお元日

噀浪水人間失格かも知れぬ

人日や人懐っこい寺の犬

初筍人の声する墓地のなか

山門が人波を吸う初詣

健脚の人の大きなマスクかな

■自由題

観音の光っていたる寒さかな

三冬の鳥居を潜りまた潜り

傲然と櫻は枯れて根津権現

初春の座布団にある金糸かな

外套が俺は乱歩と名乗りけり

冬晴や海ある方を指さしぬ

小学校に裸木中学校に裸木

風神が右側にいる淑気かな

遊郭の跡地にぼつり仏の座

寒風に少し震えて絵馬の猿

音もなくパトカーの来る冬の昼

痛そうに冷え切っている運動場

着膨れの分だけ列の伸びにけり

長谷川 裕

富永みどり

小林苑を

飯田義和

寺井和正

横山美奈子

及川奈都子

佃 亜希子

目黒洋次

水沢遼一

工藤 掉

小林苑を

鳥羽 梓

相葉喜孝

笠井亜子

内藤隼人

土岐田十内

月島恭子

松山弘雄

相澤陽介

さっちゃんね

128 かい目

かまちのひろ



かまちひろ先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞)

編集後記

梅に雪冬極まりて爛つくる

岱潤

先月号を以て月刊『浄土』は、通巻九〇〇号を迎えることができました。

昭和十年五月、大正大学の先生たちを中心に発刊した『浄土』は、戦争中も休まず発行し続けましたが、二十年三月印刷しおえた雑誌がそのまま印刷所で灰と化してしまつたことがあり、それから一年の休刊はありましたが、戦後再発刊した雑誌はその後様々な苦難を乗り越え、平成五年より今日まで、この体裁を続けてまいりました。

しかし昨今の出版物に関する状況は余りに厳しく、活字離れ、月刊誌を敬遠す

る風潮など、会員の減少を食い止める力は、私たちにはなく、現在の体裁を続けることは困難となりました。そこで来月号より十六ページ減らさせていただきます、三十二ページになりますことをご了承くださいと思います。

そこで、誠に残念ですが二〇〇三年四月号より十三年間も連載をしていただいた関谷子さんの「会いたい人」は今月号で最終回となりました。この連載はいろいろな出版社から単行本として出版され、四冊にもなっています。関さんの絶妙な取材力で、多くの著名な方々が本音を語っていただいた楽しいページでした。本は薄くなりますが、内容は今まで以上に

充実したものをお届けできますよう、編集部一同努力してまいる所存です。どうぞ来期も続けてご購入いただきますよう心からお願い申し上げます。
(長)

編集チーフ 編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十二巻一・三月号 頒価六百円
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十八年一月二十日

発行 平成二十八年二月一日

発行人

編集人

印刷所

千一五〇〇一
東京都港区芝公園四丁目四明照会館四階

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三三五七八六四七
FAX 〇三三五七八七〇三六
振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
蔵谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森蔵寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山清浄華院)
脇博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名()を入れる・入れない

※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と発送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、ご注文をご記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax(03-3578-7036)、メール(hounen@jodo.ne.jp)、または
ご郵送(〒105-0011東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

檀信徒の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

毎日のお経だから
心のこもったオリジナルな
ものがいい。



薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の皆様へ

写詠歌 セット

浄土宗歌「月影」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう！

当会オリジナル新商品!!

※ご注文と詳細はウラ面へ

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Faxまたはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。